

## 大沢地藏橋 草取りの後の茶飲み話

お袋と妹二人が疎開していた大沢地藏橋の農家のご隠居さんで当時七十歳近くの老婦人（昭和二十一年七月、田んぼの草取りの後）。まだ足腰も達者で野良仕事もする。猫の手も借りたいこの時期、義理で手伝う私や妹たちを指導しながらひよとり（日雇い）の若い娘達を冗談混じりで叱り飛ばす。地藏堂の前にむしろを敷き、逆川の川風を受けながらの昔話、又始まったよ、ばあちゃんの話と。これが潮時とばかり、一人去り、二人去り、話の聞き手は俺一人。

「目の前の野田街道と天嶽寺の間の田んぼは深い。それは昔、川だったから。野田街道は猿島道、大沢橋の橋替えの時は寺橋を渡り、久伊豆神社と天嶽寺この地藏堂のこの道を通り、地藏橋を渡ると逆川沿いを茶畑へ。そこから日光街道に出るこの道は吉川から先、千葉の人達の間道だったわけ。私も父親から聞いたこと、家の者は聞き流したがね。身近なこの辺りのことだけでも伝えて行かないとね。嫁入り前、両親と三人で東京見物、大沢橋下宿の福井さんの前、野田街道の突き当たりから鉄道馬車に乗り、千住茶釜橋へ。馬車を降りると人力車に母親と私が相乗り。千住の町中はすこい混雑、人力車は時々立ち往生。千住大橋の上で隅田川の川風にほっと一息つき。三の輪から日本堤山谷堀で父親がここが有名な料理屋の八百松だと。店先に人力車が一〇台以上並んでいる。待乳聖天様の小高い丘が左に、その先右手に観音様の五重塔、お参りしてから伝法院前、天ぶら屋で昼食。その天ぶらの旨いこと、ここだけの話だけど越谷大沢では食べられない。（伝法院通りに大黒と中津がある）帰りは東京の馬車鉄道で上野へ、日本鉄道ステーションと汽車を見て人力車で千住へ。道が狭くてひどい道、一里足らずの道のりだけど若い私が疲れたから両親（ふたおや）もぐったり。東京の馬車鉄道は二十四人乗り、丁度倍の広さ。馬車もきれいで二頭立。馬車賃は一人二銭、私が払ったから覚えてる。千住の町は一日中混んでいる。三つの街道がここに集まっていること、後で人に聞いて知りましたよ。茶釜の発着所で小一時間待たされ、座席は一杯、若い男が二人車掌のところを立てている。本当はいけないらしい。草加の町に入ったら道が混んでいる。十五日、六斎市、五と十の日、六日市日。馭者は馬車から降りて歩き出す。松原でやっと人並みが途絶えてね。大沢橋も祭りの人出で渡れず、中町裁判所前で下ろされてしまい、観音横丁から柳原の土手を通って寺橋を渡り、帰り着く。母親は人力車で一足先に。鉄道馬車は疲れないが人力車は駄目。話の種に一回だけ乗ったけど。東武電車も一番乗り。越谷駅から、そう、今の武州大沢駅、まだ千住駅が終点でね。若いときのこと覚えてるけど、この年になるとお昼のおかずもねえ、忘れるよ。農家でも腹一杯飯も食えない。三度三度味噌汁と大根の古漬け、闇で買う魚は鯛かサンマの開き、玉子だつて三日に一回。町場の皆さんから見ればいいけどね。忘れてるんじゃないね。同じものの繰り返し、だから記憶に残らない。いつになったら浅草の旨い天ぶら、食べられるかね」

草取りの後の茶飲み話、六十年経った今は田んぼも畑も工場に住宅地。お孫さんも六十七八になる。あの時、小学一年か二年の女の子、俺のことなど記憶にない。去年から馬車鉄道のこと、調べてみてこの時のご隠居さんの話、間違いなし。俺も今、記憶していることは書き残そう、出来るだけ。恥も罪も一切合切。